

点点

トレメラ | 言語をつくるはなし

富井貴志さんの対話

点点 (ぼちぼち) vol.6

2025年8月7日発行 著/発行 コイズミアヤ
coizumi@s17.so-net-net.jp

これは、美術家のコイズミアヤが、ブランクーを「盲目の」彫刻家だと勘違いしたことから、美術や身の回りの事象について、ぼつりぼつりと書きはじめたフリーペーパーです。話題が横滑りしつつ、『ZINE おかげん』に参加したり、著書を出版したりを間に挟み、vol.5 から2年半以上間が空いてしまいましたが、お久しぶりの発行です。もし良かったらおつきあいください。

今回は「トレメラ」という名前の独自言語をつくった、木工作家の富井貴志さんへのインタビューの記事をしました。富井さんは元物理学学者で、後に木工の道へ。現在は新潟県長岡市小国町で制作をされています。昨年末に発売された私の本「しくみの内側のしくみ 思考する手仕事のレシビ」(2024 コトニ社)の出版記念に、ツバメコーヒーの田中さんが企画を立ててくださり、2月にシラスの燕三条カルチペイトチャンネルから配信したトークの相手役をしていただきました。その際、独自文字の制作途中のメモが配信場所だった富井さん宅の間にあったのを見かけて気に入ったのです。富井さんは時々、その文字(言語)を使って SNS に詩のような短い文を投稿しています。『点点』vol.5 の最後に言葉について少しだけ書いた「詩が先だったはなし」に続く話題と思って企画しました。富井さんについては Instagram@takashitomii、トレメラの投稿は彼の Threads を見てみてください。

富井さんのトレメラ作品。書かれている言葉は「1枚の木の血が僕を宇宙のはじまりへと運んでくれる」

A:アヤ ----- 言語を作るようになった経緯を教えてください。

T:富井 ----- 1人の単体の生き物として居たら、言語っていうのは生じないでしょう。1対1で毛織いの代わりに始まり、人数が増えて言語が生じたという説があったりという話を調べてみたりしていました。コミュニケーションするために、言語が生まれたとすると、はじめに文字ありきっていうことはまあありえない。だけど、僕のこの言語は文字ありきなんですよね。

『驚異の珪藻世界 The Amazing World of Diatoms』(出井雅彦、佐藤晋也、デイヴィッド・マン/2020 創元社)の中に出てくる(電子顕微鏡の写真的)形を元に文字を作ったんです。



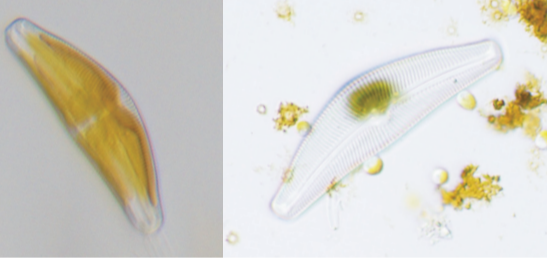
ミクロの世界に広がる摩訶不思議な造形美



この本の「キンペラ」のページ

A----- (本を見せてもらう) あー、先に言われてからもあるのだろうけど、これ全部文字に見える!本のキャプションに「キンペラ」とあるけれど?

T----- 「キンペラ」っていうのが学名で、唇の形をしている珪藻。日本語だと「クチビルケイソウ」っていう名前。これのガラスの殻にあいている穴の形で、珪藻っていうのはガラス質の殻をもつ単細胞の藻類。普通にアルファベットの形みたいじゃないですか。僕がこの本を見たのってアヤさんが顕微鏡で庭の水の中の微生物を見に来る前だから、去年の1月とか2月なんです。3月に来たんですよ(富井さんは生物顕微鏡で微生物の観察を日課にしていた時期があり、私たちがそれに参加させてもらったことがある。大興奮だった)。今年の2月になって毎日雪かきしていたら、ほんとに体疲れて何もやりたくなくなってきたときに、今なら文字作れるかもと思って。



↑富井さんが生物顕微鏡を用いて撮影した「クチビルケイソウ (キンペラ)」左は葉緑体が綺麗に生きているもの、右は死んでしまっているけれど被殻がよく見える

A----- このクチビルケイソウの穴の形の時点で、何パターンぐらいあるのかな。
T----- まずSっぽいパターンがある、あとこれはCっぽいものもあるし、Cが途中で繋がついているものもあるし、これはEっぽい。あとはCとEが繋がっているみたいのとか、Cの上からEになっているのとか、Cの鏡像と結んでいるのとか。これはこここの繋がりの部分をなくしちゃえば、Xみたいな。Xと捉えて4つの先端の羽根とかははらひの方向を変えちゃうとか、そういう風にして32文字作ったんですよ。

A----- アルファベットって26文字ですよね。
T----- 32文字の言語ってあるの?って ChatGPT に聞いたら無いて答えたのね。実はそれは嘘なんです。ペルシア語が32とかアイランド語が36文字とか色々なんですけど。嘘だとすぐには気がつかなくて、無いのならば言語にしようと思ったの。
はじめは、英語で何か文章を書いて、アルファベットに1文字ずつ当てはめて、それを作品にするとか、またはローマ字表記で日本語の文章をとか考えていたんですけど。ちょうど少し前から、ChatGPT を結構使うようになっていたから、これで言語作れるだろうと思って。
A----- ChatGPT は前からよく使ってたんですか?
T----- 展示でお世話になった人から ChatGPT 使ってますかと聞かれて、まだその頃使ってたんですけど。有料版をどういうふうに使っているかを話してくれて。きっと富井さんみたいな人はありますよと言われて。
去年の12月に使い始めて。ちょうど1月の終わりに『工芸青花』の原稿締め切りがあったんです。雑誌の文章で「我谷盆」について書いてという依頼。我谷盆、僕は作っていないんだけど、僕のものづくりの考え方をベースにして書けばいいって言われて引き受けた。その書き上がったものを ChatGPT に読ませてみたら、全然ダメな感じでした。
A----- ダメっていうのはどういうこと?
T----- まず勝手に要約して書き直おすとするわけ。でも、色々やりとりしてきていた。原稿は僕のものづくりの哲学みたいなことの中の、「欲」についてを主題の中心にして書いてあるもの。「欲」っていうのは、どんどん増大していくような数値というかと、概念として捉えていたんですよ、エントロピーみたいな。そうしたら ChatGPT

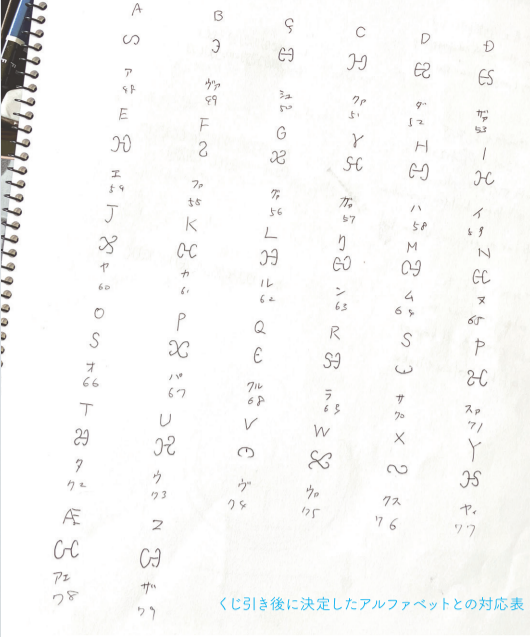
がいきなり「欲が循環する」って言うてきたんですよ。「循環!」ってなって、あそこかエネルギーにとらえた方が面白いのかなって、保存する量と。そういうアイデアのきっかけをくれる。それでこの32文字で新しい言語を作りたいけどどんな方法があるかって ChatGPT に聞いてみた。どんな言語にしたいのかを考えましょうって言うてきたわけ。

(その時の ChatGPT が書いてきた画面を見せてもらう。実際のもより若干省略して記述しています)

- 1 どのような言語をつくるのか
①言語の目的
・芸術的な言語→美しい響きや独特の表記を重視(エルフ語、ドヴァーキン語)
・機能的な言語→計算や論理的な用途を重視(ロジック)
・秘密言語→限られた人だけが理解できる(クリプトラングージ)
・実用的な言語→他の言語話者にも学びやすい(エスペラント)
②言語の雰囲気
・古代風(神秘的、荘厳)
・未来的(簡潔、機能的)
・部族言語風(音が独特)
 - 2 文字のデザインを整理
①文字の種類
・音楽文字→1文字1音(英語・ローマ字)
・音節文字→1文字1音節(日本語のカタカナひらがな)
・表語文字→1文字1単語(中国語の漢字)
②文字の順序と分類
・32文字の中で母音と子音を分けるのか
・すべてが独立した音素なのか
・文字の書き方(左→右、右→左、縦書き)
 - 3 音のルールを決める(音韻論)
・母音の種類
・子音の種類(破裂音、摩擦音など)
・音の組み合わせ方(母音と子音の並び、発音の制限)
 - 4 文法を設計する
①語順
・SVO(英語・中国語)
・SOV(日本語・ラテン語)
・VSO(アラビア語・ケルト語)
②活用の有無
・動詞の時制の有無
・名詞に複数形をつけるか
・格変化を持たせるか(主格:彼が/対格:彼を)
③単語の作り方
・派生語のルール(動詞から名詞をつくる方法)
・前置詞・後置詞
 - 5 単語を作成する
・基本単語(日常的に使う動詞・名詞・形容詞)
・単語の規則性を決める(例: mari が水なら、marito は湖などの規則を作る)
 - 6 言語の表記ルール
・句読点をどうするか
・大文字小文字を作るか
・数字は独自のものを使うか
 - 7 試しに文章を作る(そうすると文法の問題点が見えてくる)
・例「私は水を飲む。」SOV→ Mi neta tofe.
・例「この川は美しい。」SVO→ Neta zino mi.
 - 8 翻訳練習と語彙拡張
・例「聖の王子さま」や「聖書の一節」を翻訳してみると、言語の調整がしやすい。
- まとめ
32文字を使った新しい言語を作るには、以下のプロセスを進めるのが効果的です。
①言語の方針を決める(目的、雰囲気、用途)
②文字の整理(音楽文字か、音節文字か、書き方)
③音のルールを決める(母音、子音、発音の組み合わせ)
④文法を作る(語順、活用、格変化の有無)
⑤単語を作る(基本単語と派生のしくみ)
⑥表記ルールを決める(句読点、数字、大小文字)
⑦文章を作り、調整する(試しに翻訳してみる)
⑧語彙を増やし、使えるようにする

A----- 芸術的な言語でエルフ語、ドヴァーキン語っていうのは、何を持って芸術的なんだろう(後で調べたら、エルフ語はJ.R.R. トールキン『指輪物語』に登場するエルフが使っている架空の言語。ドヴァーキンはゲーム『The Elder Scrolls V: Skyrim』に出てくるキャラクターの名前で、ゲーム内でドラゴノ語というのがあるらしい)。言語の目的は?ってまず聞いてるところが ChatGPT っぽい。
T----- はいよね。僕が元々1つだったものに戻りたいっていうのが考え方としてあるので、こういう風に問われたら、古代語風で、芸術的でとかいうふうを選ぶ。あとは文字はもうあるからアルファベット型と、..
A----- 文字と音について聞いてくるんだね。
T----- 今回は文字があった上で設計しようとしているからそうなるちゃうけど。言語として本当に成り立つ時はそんなことはなくて、文字がない言語があるわけだから音が先行するのだろうと。文字は何かしらの権力と結びついて生まれてきていると思うんですけどね。記録しなきゃいけないっていう。音だけの言語っていうのと成り立ちが違うと思う。

A----- 記録するって意味でね。音だと自分のいる範囲の話だね。
T----- そう小さい集団では音だけで充分なはずが、大きい集団になった時に、文字っていうのができるはずだよ。
A----- そういうこと考えると文字は時間を超えられるみたいな感じがすごい。同時じゃなくても伝達できる。
T----- それで、とりあえず作らせてみたんだね ChatGPT に語を。するといきなり(既存のアルファベットを使って)色々生成してくる。
A----- そのいきなり出てきたっていうのは、ChatGPT は知っている言語の中からアレンジして作って見せてしまうということなのか。ニュアンスもまあ確率だもんね。だから向いているのか。
T----- そう、それっぽいのは絶対できるはずなんです。ラテン語とかギリシャ語とかを参照しつつ、音節を短くして生成してくるん



くじ引き後に決定したアルファベットとの対応表

ですよ。まず「自然」に関わるような語を出してきて、既に詩っぽくて。ここからもっと原始的な感じにするのを聞いてみたいとね。響きをちょっと変えたりするかな(提案されてきたものを使うか変化させるかやりとりしつつ)。

A----- (画面を見せてもらいながら) そうだね、(原始的に素朴にしようとして)コンパクトになりすぎるとシンプルで直接的で、記号的になりすぎちゃうから、そういうのを避けつつ感じてね。

T----- 今度は、その生成した語につくった32文字を当てはめていくんだけど、これはもうね、くじ引きです。一方の紙にアルファベット+6文字の記号、もう一方に作った文字をその数だけ用意して、一つずつ引いていったの。

A----- 音も ChatGPT に聞かれていますよね。
T----- 音はね、ここから決める。大体ほらアルファベットの読み方あるじゃないですか。それを元にして、こんな感じでっていう風に想像しているはずなのね。

A----- 音はこれカタカナで書いてあるけど、この後発音記号とかになって音声が言わせたりにしている?喋らせているよね?

T----- TTS (Text to Speech) っていうアプリがあるの。ChatGPT で音(カタカナ)をつけて、単語がある程度増えたら文章を作っていく。それで最初はカタカナで音を併記していた。

A----- 言いたいことをまず ChatGPT に入れて?
T----- そうまず入れてアルファベット+6文字の文章書いてもらって、それに文字を対応させる。最初の頃はそのままだったんだけど、途中からはそこから考えて、いじる。

A----- 最初の日本語のオーダーがあって、その持っている単語との調整が起きるよね。普通の英語の翻訳もそうだと思うけど。

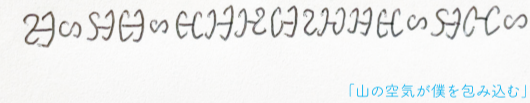
T----- 日本語入れて1回訳すじゃないですか、すると直訳的なことを言ってくる、その時に、更にああじゃあどうしようかなみたいになって。

A----- ニュアンスが違ったり文脈が違ったりするから修正するの?
T----- そういうこともあるし、逆になるほどってなる時もある。語順を入れ替えたりとか、この言葉よりも違う言葉じゃないかなとか考えて変えていく。日本語の方をいじるみたいなことでも書いてる感じかな。

A----- それが見たいの!だんだんそれを自然にやるようになるのちゃうよねきっと。だんだん言語に慣れしてくると、調整が効いてきて、その言語で喋るべく言葉を発するようになるじゃんきっと。

T----- うんうん、そういう感じある。
A----- 最初の頃とか、まだ乗りこなせてない段階の方がそこに幅があって、面白そうだなとも思う。

T----- ある意味そうなんだけど。これ「トレメラ」っていう言語の名前にしているけど、「トレメラっぽい」っていうのがあるんですよ。僕の中では。トレメラが言いそう、トレメラっぽい言い方っていうのがあって。



「山の空気が僕を包み込む」

日本語で「山の空気が僕を包み込む」っていうのに対して、「空気の中の山が私を包む」と。「山の空気」っていうのを、「空気の中の山」っていうふうに戻してきた。そこは逆だねって言ったら、ああそうだねって正しい語順に修正した。でもそれまで逆の使い方も既にしたことがあって、そっちの方が面白くなって思い直した。むしろトレメラ的には面白い。「山の中の空気」って、ただの空気だん「空気の中の山」っていうと、空気の中に含まれている。いろんな山の事、山の概念みたいなことまでイメージできてる。

A----- 急に入れ子な感じになるね。実際も大きな空気の中に山があるけど、山の中の空気には山の成分が入っているみたいな多層な感じ。

T----- そういう感じになりますよね。トレメラ的に響かせるっていうことを最近はずごく意識していますね。

A----- 確かに、言語に引っぱられて話すみたい。
T----- そうそう。言語に引っぱられて話す内容が変わるのっていうのが、日本語でも勿論あるじゃないですか。こう表現した方が、日本語っぽくっていうこと。そういう風にして、言葉の順番を選んできていったりとか普段しているんだと思うんですけど。

A----- でも、経験が積み重なってたり、慣用句ができるし、あと、社会的なコードができちゃうから、こういう時はこういう風に言わないといけないみたいなことが、どんどんパッケージされていっちゃうけど。そうなる前の面白さがあるよね。

T----- 反対に(空気と山の語順)既に逆に使っていたってこと、パッケージができていたってこともありましたよね。トレメラのパッケージ。
A----- 言語がアイデンティティやキャラを獲得していくみたい。
T----- そうですね。多分その言語のキャラクターみたいなものもともと、小さい集団、150人くらいだとまぐまぐとまとまっているという語があって、それぐらいの単位で同じ言葉喋っている集団がいくつもあつたわけ。みんな違う言葉を集団ごとに喋って。方言ってだいたいふれちゃったけど、今でも残っていて。色々な地域の色々な方言があるのは、そこに暮らしている人たちの大切なことだったりとか、世界観だったりとか、そういうものが反映されて成り立っているはずでしょう。すぐ標準語訳にするけれどそんな風に訳せるものじゃないはずですよね。違う意味を含んでいて、そこにズレて生じていて、それをもっと大きくすると、国と国との間で違う言語があって、それを翻訳して、またそのズレが生じる。だんだん集団を大きくしていくとズレも大きくなっていく感じですよ。価値観が違うから翻訳できない言葉っていうのが出てくるはず。あるAっていう集団とBっていう集団が、戦いとか何かの果てと一緒になっちゃうと、Bの言語がなくなってAの言語になった時っていうのは、Bの人たちの世界観も一緒に失われるということが起きる。そんなこと考えていくと結局、この「トレメラ」って言語は僕の世界観が表現できればいいわけなんです。はじめは単語をすごく増やして、日常のことと言えるような方向性で考えていたの。「朝コーヒーを飲んだ」とか言ってみていたん

だけで、それいらないかと思って。今は僕のものづくりに関わるようなことをだけ表現できればいいかと思っている。単語もそんなに増やさないし。

A----- なんかずごく濃ましくなってきたぞ。

T----- 僕ら日本語で当たり前に育ってきて、それで表現するっていうことは当たり前にしてきたけどでも、その言葉の枠自体は、僕ら別に個人の世界観として作ったわけじゃなくて、もう日本っていう国の価値観に枠をはめられているわけじゃないですか。そう考えたときに、それで表現できないこともあるよね。もう不自由になっているか。細かい表現ができるように設計されている言語だからものすごく細かいことを言えるんだけど、ものすごく細かいことを言ったために、こぼれ落ちる部分も絶対あるわけじゃないですか。それをまるっと包み込んで、自分だけが理解できるっていうものがあってもいいんじゃないかなって感じて思っているんですよ。

A----- 面白いな。その方言の話とかもろろわかりやすいけど、社会的な話だけで、同じ言葉を喋ってるから、それだけでコミュニケーションをとっている責任を果たしているみたいな勘違いがあるかと思ってる。例えば語彙の多い少ないに個人差があるでしょう。さっき世界観で言ったけど、たとえ同じ数だけの語を持っていても。その語の持っているニュアンスが、人によって相当違うし、どの語に重みがあるかとか、どの語が解像度高いとかかってすごく違うから、
T----- そうですよ。ね、同じ言葉喋っていても通じないですよんね。

A----- 最近思うのが、語彙をたくさん持っている教養のある人と、語彙が少ない人が敵対した時に、大体教養のある人の方が、言葉足らずの人の言う乱暴な言葉を責める事が(ちょうど参議院選のタイミングで話している)よくあるんだけど、雑に言っている人の言葉の中に入っているニュアンスが実は広かったりする(言葉のスケールが合っていない/内容や感情が整理できていない/例えば「治安が悪い=怖い」。雑な人と、そうじゃない人って思っていたんだけど、ある種話している言葉が違うんだって思ってる。そこでは、その語の使い方を責めているのか、その姿勢を責めているのか、何を責めているのかもわからない状態で喧嘩してみたいになっているんだって思ってる。実際にその雑な言葉を政治家が利用し始めたから大変なことになっている。同じ言葉を喋ってないというところに気が付いてなさすぎると思う。そうすると更に、コミュニケーションを円滑にするようにしなくちゃっていう方向に走っちゃうじゃん。でも、このトレメラは完全に逆のことをやっていて、それが面白いなって思ってたんだよね。そもそも自分の言葉は自分だけが持っているものだみたいなところにはまず立たないと、コミュニケーションが本当は始まらないんだっていう気がする。

T----- 多分そうなんですよ。みんな日本語喋っても同じことを喋っている気になっているけど、みんな違うよみたいな事を、別の言語体系で表現しているかもしれない。

A----- ここでの言葉をどういう言い方、言い直しをするのがいいかっていうふうに丁寧に選ぶときに、解像度が上がっているわけじゃないですか。でも、普段コミュニケーションをとるとき、英語が喋れるようになるとき、言いたいことを意識せずに喋れちゃうような状態になるから、言葉が透明になっちゃうけど、これやると言葉に具体的な抵抗があるじゃないですか。触れる感じがするから。
T----- そう。こう言ったときと、こう言ったときは全然違うよっていうのがわかる。

A----- 言葉を作っていると世界を作っているみたいな感じに。
T----- 自分の世界観みたいなを同時に作っているみたいな感じにはなりますよね。

A----- もともとその詩的な表現をしたいみたいな意図はありますよね。
T----- なくはないけど詩的な表現をしたいっていうよりも、その音節を短くしたいっていうのが、あったかな。どうやったら詩的な表現になるかっていうのは微妙じゃないですか? やっぱり語数が少なかつたら、勝手に詩的になれるような気がする。

A----- 言いたいことにぴったりフィットするような語があればそれに頼っちゃうけど、それが無い時にどういう言い直しでとか、どういう組み合わせで、そのニュアンスを感じさせるようにするかみたいなところ。
T----- その例はあるかもしれない。あの○○っていう語を作らないで、表現するみたいなのはよくやるんですよ。

A----- つまり、1対1対応でこのことはこれ、このことがこれみたいに直接接地させちゃうより、少し迂回した状態だけれど、なんとなくニュアンスが伝わるだろうっていう語を使う事によって、比喩的なものがふくらむ感じがする。
T----- これ作ってなかったら、そんなこと言わないな、みたいな文章が生まれてくる。

A----- 「世界は白かったと記憶している」のところで、「世界」という単語も「白」という単語もないっていう説明を投稿が見かけたのだけ。

T----- これ作ってなかったら、そんなこと言わないな、みたいな文章が生まれてくる。
A----- 「世界は白かったと記憶している」のところで、「世界」という単語も「白」という単語もないっていう説明を投稿が見かけたのだけ。

T----- 「世界は白かったと記憶している」
A----- 「世界は白かったと記憶している」

T----- 「白」をどう表現するかっていう問題と、「世界」っていうのは何なのかっていう問題が出てきて。
A----- 世界って英語で言うときにワールドなのかユニバース(コスモス)もなかかわかんない。
T----- わかんないね。世界って言ったときに、何をそれが意味しているのかって普段深く考えないから。
ChatGPT は「白」という単語には「雪」を当てて、「世界」っていう単語は新しく作って提案してきたんですよ。僕の考えで「白」は「光を反射する」と表現することにした。「世界」は ChatGPT と話し合いながら決めた。「空間」っていう単語は既に作ってあるんですよ「Sel」っていう。これに時間的な意味も含ませて、世界って語にしようという流れ(Sel → Sol →)で「Solen」っていう単語になった。世界っていうより時間空間みたいな意味のだけど、自分の周り全部みたいな感じの意味で使ってる。
A----- 実際に使うことで語が育って感じがするね。
T----- そうですよ。ね。「時間」って単語がなくって作るようになってきたの。この言語には時制がないんですよ。「時間」っていうのは存在とともにあるはずだから。存在と共にある時間という意味で「時間」という単語を作って登録した。
A----- 何かに登録するの?
T----- 単語をエンタールに登録していますね。260語くらい。結構なこと言えますよ。日本語で表現している意味では言えているわけじゃないから、もっと抽象的なこと言ってる。

A----- 「トレメラ」っていう言語の名前について教えてください。
T----- これも ChatGPT と相談していくつ提案してもらって。「トレ」はラテン語で「高い」「塔」とか「急な流れ」とかで、「メラ」っていうのはギリシャ語で、主に「昼」とか「日中」とか「日」、それを転じて「時」みたいな感じ。基本的に単語を作るっていうこと自体は ChatGPT でできる、AI が得意なやつですよ。で、実は音楽とかも AI は得意で簡単に作れちゃう。ベックリしますよ。
A----- トレメラの文字は、表を見なくてもある程度書けるようになったんだけ?

T---- 書けるやつは書ける。最近練習してなくて、でもすぐに思い出せませぬ。

A---- 文になった時に、本来は文節ごとに区切れがあるはずだけど、繋げて記しているよね？

T---- 昔のメソポタミア文明の楔型文字が彫ってある石板が、全部つながっているんですね。それがかつこくて、そういう感じにしたかった。だからスペース開けない。

A---- そもそも、あれは文節あるのかな？ 簡単な語を3つとか、4つとかだったら覚えちゃえば書けるじゃない。でもこう連ねて書いたやつを後で読める？

T---- 読むのは結構大変ですけど、そればかりやっているときはすぐ読める。



トレメラ アルファベット

T---- アルファベット表を 32 文字の 1 年に 1 個ずつ作ると思っていて、(頭に 1 文字を年ごとに順に記して) サインと同じように順番で付けることにした。その作品がいつ制作されたかがわかる。こういうことやっているとか、いろんなこと思いつける。考えるって大事だなと思って。アイデアがどんどん湧いてくる。

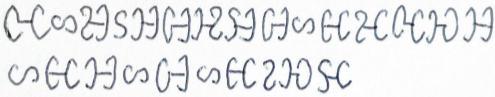
A---- 私の場合はすぐに興味が横道にそれ気味で、例えば漢字ってどうなっているとか、宇宙ってどうなっているとか、散漫になっていくから、なかなか制作に直接は結びついてない感じなのだけど。でも、これは自分の制作についての世界観を醸成していく感じがあるね。

T---- またそれははじめから、狙ってやろうとしてなくて、はじめ池の水を顕微鏡で見て、その文字を作ることになって。作品に使ったら面白いってだけで入っているから。たまたま ChatGPT にもうすでに僕の工芸について考え方が入ってあったから勝手にそういう感じを生成してくるみたいのもあると思うんですね。タイミングが良かったんですよ。そのスペース入れない文字列もたまたまメソポタミアの何かを見たんです。

A---- 例えば 32 文字だったら、全然かぶらないようにパリエーションとして作るみたいなものもありえたけど、これだと少ない要素 (S や C) の組み合わせで作っているじゃない。ある意味視認性が悪くて、だけど記号としてはエコというか。それが元々のクチベルケイソウから遠くに行かないのいい。

T---- やっと顕微鏡から作品に繋がった。

A---- 古代っぽい言葉にしたいみたいなことも、この形がすでにそういう感覚を連れてきている。



「僕は自然に再接続する鍵を作りたいだけだった」

T---- そもそも単細胞生物に刻まれている形状なので。あとは、僕のものづくりの考え方自体が「自然に再接続する鍵を作りたい」で、その鍵を物として作るということなので。時間巻き戻す系ですね。みんなが分かれてなかった時の状態に、何かしらの憧れを抱いていて、そういう表現がしたいと思っている。生物からのメッセージみたいなことも、既にずっとこれらの刻まれた模様が何か言い続けているのかも。

NHK-BS の食の番組で、ニューヨークの人たちが、ファストフードを食べる話を見て。そのマンハッタンにいる蟻の事を調べたら、蟻のタンパク質がとうもろこし由来のだっていうことが分かったっていう研究を紹介していたんですよ。炭素って原子核に 6 個陽子があって、6 個中性子があって、周りに 6 個の電子が回っているっていうのが一番多い。陽子の数と中性子の数を足すと 12 で C12 っていうんだけど。C14 っていうのが中性子 8 個のやつでよくあの考古学とかで時代測定放射性元素って扱われるやつで、C13 っていうやつもあって、それらの比率を調べていくと、トウモロコシ由来のだっていうのが言えたらいいんですけど、その研究で。人間だともっと複雑だからわからないけど、蟻くらいだと分かるしくて。要はその蟻がトウモロコシだったっていうことが、記録されているわけじゃないですか。それってすごいなと思ったんですよ。当たり前なこと、ちゃんと記録されているじゃんそれ自体にあって。もっと僕ら知っているっていうことがあってもおかしくないよねと思うんですよ。あながち SF 的でもないような気がしてきて。だって、僕ら何かだったわけだから。そもそも宇宙がどうやって始まったかみたいなことを、今ぐらいわかっているってちょっとおかしい。たまに出てくる天才の人達ってどう考えても普通じゃないと思うんですよ。あの人がたつて多分たまたまなんかの刺激で思い出しているはずなんです。そこまで論理的なことだけでつめていって、ああいうことは出てこないと思うんですよ。

A---- ChatGPT も論理じゃなくて確率とパターン認識とでできていて、意外と論理が苦手みたいなことを聞くと。実際何かを思い出したりする時に、こちらから働きかけて求めて思い出す事もあるけど、関係なく思い出したりすることもあるじゃん。そもそも既にロジカルじゃないから。

T---- これをどういう風に発展させて作品にしていこうかなは考えています。言語っていうのはまあ減る方向で、方言とかが標準化されていって。

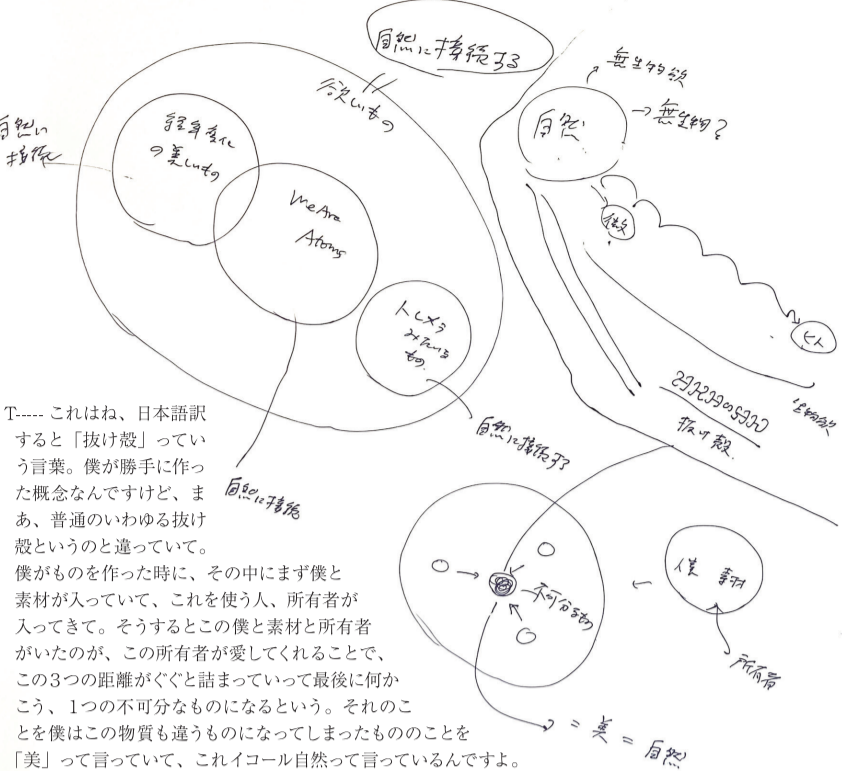
A---- 誤用も含めてですけど、結構言葉が変化してくから、増えていくもありそう。でも何もかもエモいって言って済ませることで減らされていく感じはあるよね。

T---- そのコミュニティの価値観で出来上がってきている言葉だから、自然な気がする。

A---- 私なんか感化されやすいから、その時に読んでいた本に出てきた印象的な言葉をだいたい次の時に書いているのはよく(無意識に) やっていて、手近な言葉を使っちゃうって思う。前だったらこの言葉をそのニュアンスでは使わなかったけど、今はそれを使うというような。だから何を読んでいるかで違ってくるなと。

T---- そういふのを、色んな人が繰り返していくことで、その時代の言葉が醸成されていくんだと思いますね。

A---- ちょっといくつか、好きな言葉を書いて。(富井さん紙に書く) 単語は書けるんだね、空で。



T---- これはね、日本語訳すると「抜け殻」っていう言葉。僕が勝手に作った概念なんですけど、まあ、普通のいわゆる抜け殻というのと違って。僕がものを作った時に、その中にまず僕と素材が入っていて、これを使う人、所有者が入ってきて。そうするとこの僕と素材と所有者がいたのが、この所有者が愛してくれることで、この3つの距離がぐんと詰まっていって最後に何かこう、1つの不可分なものになるという。そのことを僕はこの物質も違うものになってしまったもののことを「美」って言っていて、これイコール自然って言っているんですよ。この自然っていう話をしつつ、

A---- 「自然」っていう語は作ってないって言っていたよね。やっぱり大事な言葉ほどそれを直接指示する語を作りたくなくなるのかな。

T---- というか、自然という風に僕が呼んでいたものが、よくわからないけど全部自然だと思っていたんだけど、その自然っていうところから、人っていうのが、コロコロ転げ落ちていってしまったのはっていうふうには思っているんです。一方で、その顕微鏡で微生物を見た時に、あ、こいつらも自然から離れてきていると思ったんですよ。そういうふうには捉えたら、ここの自然って、あれなんだって思っているんじゃないですか。これって生物じゃないやつのこと？って。僕今まで微生物も自然だと思っていたけど、生物じゃないものことは僕は自然と呼んでいるのかもしれないって思っていたんだね、無生物が自然。ってなった時に、自然っていう言葉がまあ別にいらんのかな？って。これイコールだったらそのことを「抜け殻」と言うていいかなと。

A---- このこと全体をとらえるみたいな感じ？

T---- いや、僕は無生物を自然と呼ぶということに至ったという。この自分がいなくなっているっていう状態だから「抜け殻」と言うと。生物の「欲」がうまく流動し続けて混ざり合うと、無生物欲世界に至るみたいな。生物的世界から無生物的世界に至る。僕がものづくりで大事にしていることが、いくつかあって、それを「欲」という概念で捉え直した時に、今言ったのっていうのは経年変化が美しいっていうことを結局言っているわけなんですけど、それっていうのは、「欲」が混ざり合って、生物がまだいいような世界にとりあえず行くことみたいな感じのことを言っている。「We Are Atoms」のシリーズ (走査型トンネル顕微鏡を覗いて原子の並びを見ていた経験から発生したシリーズ) もみんな原子でできているということを書いていて、時間を遡るとこっち(自然)に回収されていく話で。一方で、僕らは普段作っているもの何でもいいんですけど、はじめに人っていう生き物が何かを外に作り出した時に、絵なのか道具なのか知らないけど、要は自分の中の「欲」が外に分身として現れたような状態だと思うんですよ。その分身を作り出すっていうことをした時に決定的に、僕はここ(自然)から落ちたと思っているんですけど。なのでそのものを遡っていくと、もう1回ここ(自然)に接続できるんじゃないかな。その鍵になるんじゃないかなっていう。全部結局ここに行きたいというか、遡っていくと、宇宙の始まりみたいな所に至ることあるんで、トレメラもそういう感じのことを表現する言語にしようとしてるっていう感じなんですよ。

A---- なるほどなんかすごく繋がるね。あまり全然そういうこと考えたことなかった。作品作ってて考えることはすごい面白くなってきて、知りたいことはいっぱいあるし。でも実際だと勉強するより手を動かしていった方が、気が付いたり発見したりする事とか、考えにエンジンがかかる感じがするから、それ全部好きで、でも何かそんな富井君みたいには、自分が何をやっているのかとか、何がやりたいのかみたいなことは、あんまり考えてないかも。

T---- いや制作上は考えてんだよね、アヤさんね。僕の場合は、制作上はそんなに考えてないけど、自分が何をやっているんだっていう概念みたいな事を考えるかもしれない。

A---- でもこの話はとでもよくわかるというか、ここまでついていける。私の場合は、作っている時になんか「成る」感じが見えた時にすごく感動するっていうか。それ別に、自分が作っているのじゃなくてもなんだけど。だいたい庭に山椒の木を植えて倒れそうになっていたから、何の気なしに支えの棒をして紐を結んだ。それをふと、アトリエの窓から見たら、その姿がほんとに自然な成りきれいな感じだと思ったの。特に美しい樹形とか、人が作った美しいものとかでは全然ないのに。すごく綺麗におさまっていて。あのしかもそれをあんまりこう、こだわってなくてさっさとやったのに自然ななりのようになって、すごい「成ってるな」と思ったことがあって。無為の美とか無作為の美とか言うけど、それともまた違って、作為があるなしたと人がまだ絡んでいるんだけど、人がやったってことじゃなくて、私自身がその中のネイチャーの方に所属している感じがするっていう、その瞬間ね。それが見えていく。それがある意味ここ(富井くんが言う自然)に帰ったのに近いのかもしれないなって思ったんだよね。

T---- 今これ僕がトレメラで作った歌が流れているんですけど、あの歌詞には「自然」っていう言葉が入っていたんですよ。「自然」っていう単語が一応あったのね。で、その歌詞を書いたものがあってですね。これ何だと思いますか？

A---- え、これ何？ 紙？

T---- 海に落ちているこの状態で。人が作ったやつなんです。この幅で、木を切って樹皮を剥いて乾

富井さんが海で拾った浮き

かすと勝手にまるまる。白樺の皮なんです。これはロシアとか北朝鮮の人の浮きなんだって、漁業用の網につける。それでこれを開いて歌詞をばーって書いた。ちょうど切れ込みが入っていたんですね、自然に。そしてそこに丁度「自然」って単語がきたの。それでそういえばいらんないなってなった。そこが確か「抜け殻は自然」だったかな、「抜け殻は美、美は自然」みたいなことを書いてあったのかな歌詞で。それであれ自然っていう言葉いらんないって思った。

A---- 美術の世界で、制作について言葉でコンセプトを書けとか、説明しろみたいな圧があったりするしないは揉めがちで、言葉で言えないから作ってるんじゃないってわりやすいやつね。やっていると言葉を説明するかどうかとまた別に、記号的なもの表現という事に、素材の反発があったりもする。でも、記号のことは比重が十分にある分野で、はじめ

るとすごく面白いじゃない。それにそもそも言葉自体を説明出来ないっていう。説明できないから絵を描いているんじゃないかと同じで、言葉それ自体も説明できない。言葉がいかにアラだかというか、でもそれ故に豊かな部分もあるっていうのを知ることが、翻って関わってくる。

T---- 例えばこのトレメラって言葉はこうやって書いてあっても意味わかんないですよ、見ても、見ても、そういう意味では言葉じゃないじゃないですか。古代の文字とかもそうだけど、それを解説しようとするわけだけど、どうやって解説するんですかね。

A---- 本当だね、よく解説できると思うけれど。

T---- 誰も知らない言葉って、面白いと思うんだよね。微生物を見始めたのは単純に、これまで彫ってきた世界(走査型トンネル顕微鏡で見る原子)がちっちゃすぎて、もうちょっと現実世界との間にワンクッション、スケールの大きいものを置きたいなと思ったところから始めているからで、木の細胞とかを見て、それを作品にしていこうと思ったんだけど、池の水を見たらそっちが面白そうに見えるようになって、そこから文字になるとは思わなかったね。

A---- 言葉の事を考えていると、文字ということがあるからなんだけど、言葉が凄く物っぽく感じるようになってやう。それって思い込みになって思っていたし、あんまり言葉で直接的に物だと言いつけるのは無責任すぎるかなと思っていたけど。でも言葉を作っている話を聞いていたら本当に物っぽくなって。

T---- 実際どうだかわかんないですけどね。僕が作っちゃうと物作っちゃうんですよ。やっぱね。実際どんな感じで言葉って生まれてくるんですかね。

A---- トレメラは文節で区切って表記してないし、判読に不自由なところはあ。情報っぽくないじゃん。例えば、科学が進んで物事が量子化されていたり、AIが発達すると、どんどん世界が情報化されていく感じがするけど。でもこれ使ってやり取りしていたら物っぽいと思う。

T---- 確かに情報じゃない。確かにそうですね、A---- 言語には情報っぽさがないなと思って。その情報と物質世界っていうのを対比的に考えたら、言語は完全に物の方に寄ってる感じがする。

2025年7月7日小国町にある富井さん宅にて収録



インタビュー中にそれぞれが書いたもの。左上が富井さんが語を図示してくれたもの。こちらはコイズミのメモ。

編集後記にかえて「詩の媒体としての漢字考」と「聴聞の世界」

岡崎乾二郎「抽象の力」補論「先行する F」には小さく、フェノロサの「詩の媒体としての漢字考」について触れられている。その箇所で見られているのはエズラ・パウンド編集のものだが図書館になくて、代わりに見つけたのは村形明子さんの「アーネスト・F・フェノロサ文書集成(下)」(京都大学学術出版会)。これに読みたいフェノロサ手稿の読み間違いによるパウンドの誤読や、画像資料の本文からの切り離しを直したという村形さんによる編集版が載っているのを見つけて読んだ。漢字が物の名前のように一対一対応で生まれてきたというよりは、動詞的なはたらきの表現の形として発生していることや、漢字に品詞の区別がないこと、つまり文字の配置とそれを読む主体によって、品詞的な役割を補って読まれることなどが印象的だった。また、今回のインタビューで富井さんが言葉の意味について、語や文字の使用の仕方を検討する中でよく考えられていた様子と重なるように、フェノロサが母語から遠い漢詩(中国語)の意味の立ち上がる領野で、驚きと面白さにひとりで興奮している様子が伝わってくる。英語に翻訳される時に、あまりにも不当にその豊かさを取りこぼしていると言え、漢字が単純に変換可能な記号ではなく、喩的にふくよかだということについて書かれている。翻訳がその語が使われている文化背景を踏まえないと不可能という射程より深く、その言語の発生に遡った内容は、漢字を普段使っている私にとっても未知の空間が開けるようだった。

先日、新潟県立歴史博物館へ行った際、エントランスのショップに入っている古書店で、外山滋比古の『日本語の感覚』(中公叢書)を手に入れた(文庫で今もあります)。意味論好きの多い国文学者は、音韻先行の西洋の言語学が意味に重きを置かないことについて不満をいうけれど、和歌の音の美しさに触れたら意味などどうでもよくなったと述べ、私たちの耳は癒えていると言。(「聴聞の世界」)。音韻と文字については「すべてのことが文字中心、音声軽視の前提の中で処理されている」とし、(続く「語体について」は)語体と文体について対比的に書かれている。特に日本語の出自が言文別達だということについて印象深く読んだ。(外山は座談会の速記が届く、それに赤をいれてはいけないのが気が重たいという。私の今回の文字起こしも、自動機能を頼った後に、内容を紙で印刷するのに対応するように整えるのに時間をかけた。そのときの様子が伝わるように、あえて変更を加える。手書き説明できないけれど、ネットにあげる為のテキストともまた違う感覚があると思う。)

異言語を跨ぐ現場で、その言語の媒体としての性質について、フェノロサと外山がそれぞれ対の方向(音韻言語から文字言語/文字言語から音韻言語)に向かって観察し、思考を巡らせているのを読めて面白かった。

はたらきを示そうとする目的や、声が先行して発生したのとは別の出自を持つ「トレメラ」。微細な物質世界(それも生物もつ無生物の私たち=キンペラの硝子質の外殻にあいた穴)を発生源とする文字から生まれた言語が育っていく様子をこれからも楽しみにしている。

盲目のブランクーンからはなれて

私が盲目と勘違いたブランクーンが撮るアトリエ写真に魅せられていることからはじまったこのフリーペーパーは、何を見ていて何を見ていないのか、または何が見えていて何が見えていないのかという問いとして横滑りしてきたのかもしれない。紆余曲折して今回は言葉についてのものになった。微細な銀粒子の平面的な集まりが私たちに空間を見せ、ときに独特な雰囲気私を魅了すること、言葉が物質とどうではないもの間を行き来すること、そして今後は物質とどうでもないもの間(スケール問題?)が気になっていくことを吐露しておく。

昨年アーティゾン美術館でのブランクーン展は楽しく見た。あの展示では写真よりも映像作品を見たことが大きかった。写真で見たときには掴めていなかった物の大きさが、写真から想像していたよりもずっと大きかったこと。あそこに入ると踊ったり、ものを食べたりして見るときに、日常的な家具のスケールとの違和から、あの空間がやはり特別なものに見えた。そのことも彼の写真が見知った空間と違う様子を見て私の注意を引いていたのかもしれない。

ブランクーン展を見て「点点」のことを思い出して連絡くださった人がいて嬉しかった。これからもよろしく。

「しくみの内側のしくみ 思考する手仕事のレシピ」
コイズミアヤ著/2024 コニシ社/税込 3,300 円

料理本のような体裁で作品の具体的なつくりかたに加えて制作の経緯について書きまし

